

2024 年 12 月 11 日

卒論生 吉川桜子

精神疾患レジストリデータを活用した症状の評価方法の探索

精神疾患の診断と治療の枠組みは、長らく ICD および DSM に依拠して発展を遂げてきた。これらの診断システムは臨床現場において多大な貢献を果たしてきた一方、その限界もまた明らかになりつつある。従来の診断アプローチには、厳格かつ画一的に定められているため、個々の患者の独自の症状や経験を十分に反映できないという診断カテゴリの硬直性の問題や、共存症の複雑さへの対応の限界、連続的なスペクトラム上に存在する精神疾患の症状の連続性を捉えきれないという問題がある。

このような状況に鑑み、精神疾患の研究と診断における新たな視点が求められている。米国では、精神疾患を診断名にとらわれることなく、症状を中心に据えて総合的に理解することを目指して研究領域横断的基準 (RDoC) と呼ばれる新たな研究枠組みが提唱された。RDoC では症状をいくつかの機能ドメインに分類し、それぞれを神経回路や細胞レベルの機能、行動的アウトカムに関連付ける形で理解しようとする。このような新たな枠組みは、症候学的記述に留まらない、精密かつ個別化された診断と治療を可能とするものであり、精神医療の将来的な飛躍に向けた道筋を提供するものである。日本においても、RDoC のような統合的かつ基礎科学に根差した視点を導入する必要性が高まっている。

本研究では、精神疾患のレジストリデータのうちベースラインデータを用いて心理尺度により測定された患者の症候を、RDoC の機能ドメインを参考にいくつかのドメインに分類したのち、各ドメインの心理尺度のスコアに基づいてクラスタリングを行い、各クラスターの QOL のスコアと診断名の分布がどのように各ドメインのスコアと対応しており、ドメインに基づく分類がどのように患者の症状を記述可能か探索する。抄読会では現段階での解析結果と考察、今後の展望を述べる。

[参考文献]

1. Owen, Nosological Reflections: The Failure of DSM-5, the Emergence of RDoC, and the Decontextualization of Mental Distress, Society and Mental Health, 2014